

「戦争は「ノー」それは今でしょう」

柴田昭三

戦争について、語らなくてはならないと思うようになったのは、ごく最近なんです。

戦中旧制中学時代、2年生頃から、農作業、軍事訓練、工場動員に明け暮れ、3年生17歳の時、半ば強制志願兵の予科練へ、奈良県天理市の海軍奈良航空分遣隊入隊、その後、石川県小松航空隊転属…。

当時はアメリカに制空権を握られ、敵の目をそらすため、私たちの仕事の大半は、退避壕の土方作業だった。さらに奥の能登半島の寒村へ、早苗の綺麗な田圃に、厚板を敷き詰め滑走路、裏山に退避壕を造り、付近の農家に合宿する毎日。

1945年7月、突然私達の何人かに特攻隊への選抜命令が下りてきた。小松基地にいた頃、時々、沖縄戦目指して飛び立つ、積んだ爆弾と体当たりする特攻隊員を見送った。滑走路の両側に並び、「帽振れ！」の声、ひきつった隊員の敬礼した顔が、今でも忘れることはない。その順番が、遂に自分にも廻ってきたのだ。聞けば日本空襲の基地サイパンに、つないだグライダーの綱を切って、爆弾

ごと突っ込む作戦だという。軍国主義で洗脳された私でも、その馬鹿さ加減に呆れたが、あと数か月で、海の藻屑となる現実を逃れるすべを知らない。こんな形で自分の一生は終わるのか。正直内心、めげた。

一方こんな隊内の休憩時、隅っこで、ひそひそ話の数人のグループ、東京出身、2、3歳上の同年兵「ある大学教授の話、日米の経済力、軍事力の差は桁違い。日本は敗ける」。聞き耳を立てて聴いていた私には寝耳に水の話。

そんな頃、あの8月15日、突然兵舎の拡声器から「耐えがたきを耐え、憚り難きを憚んで…」あの天皇のポツダム宣言（降伏受諾）の放送だ。軍部独裁、一億総玉砕、日本不敗神話は音をたて、砕かれたのだ。運命は大きく変わった。敗戦による落胆と「ああこれで生きられたんだ…」一瞬両者が頭の中で交錯したが、生きるという事の重大さは、私の胸を突き上げてきた。11月特攻隊と宿命づけられた私にとって、人間として生きる喜びは、何物にも代え難い。今でもあの時の衝撃の思いは二度と経験のない出来事だった。

そんな思い乗せて無蓋貨物列車でそれぞれの故郷へ帰った。そこで待っていたものは、敗戦後の現実の厳しきだった。食糧難、大

都市の焼け跡^{あと}、インフレ、足りないづくしの配給、買出し、担ぎ^{かつ}や、闇市^{やみいち}、一方では財閥^{ざいぼつ}解体、農地解放、資産制限、それはドン底生活に明け暮れた。みんな必死に生きた。生活のため働いた。その一方で生き残^{おのれ}った己の生き方を徹底的^{てっていてき}に考え、この状況を作り出した。社会的、人間的^{おのれ}原因を極めたいと、あらゆる分野の関心ある事を、書籍^{しょせき}が手に入りにくい状況下で夜半まで読みあきった。学校でこんな意欲で勉強した事が経験のない程、渴^{かわ}きに潤^{うるお}いの水^{ごと}の如く、興味が知識欲、情報、そして人生^{い か}如何に生^いくべきか、哲学にありと確信した。

当時若者の間に哲学^{てつがく}への関心が高まった。そのうち、あの私らの考えを^こ超える、人類の希望と未来をめざす日本国憲法が制定された。戦争^{ほうき}を放棄^{すうこう}する。この崇高な理念は、過去の間違った戦争^{しんし}への真摯な反省の上で、これからの平和な日本国民の目標と希望を表すものと同時に、その後の世界中で、紛争^{ふんそう}や争い事が今でも絶えない中、70年間、戦争で1人の人も殺し、殺されなかった日本人が世界からも目標とされる国となったのだ。

しかし勤勉^{がんぱ}で、頑張り屋^{がんぱ}の日本人が戦後^{こくふく}を克服し、世界市場に進出するに伴い、バブルを生み出し、これが永遠^{えいゑん}に続くと錯覚^{さつかく}しだし

た。財界や政治家は^{おご}驕り出し、憲法はアメリカから押し付けられたもの、とケチをつけ出した。私もその^{ころけっこん}頃結婚、子どもを育てる身になり、毎年少しずつ収入も増えていた。家族たちには、戦争の話は暗くて、聞きたくない、と言われ、私たちも過去の^{ひさん}悲惨な思いを^{ほり}掘起こすこともないかと引いた。この甘やかしが、今にして思えば^{まちが}間違っていた。

やがてバブル^{ほうかい}崩壊、株価大暴落、大不況^{ふきよう}はじわりじわり生活を^{あっぱく}圧迫しはじめた。その後日本の経済はじりじり悪くなり、都市と農村、格差の広がり、就職難、中小^{れいさい}零細業者^{どうさん}倒産、最近では大企業もグローバル化の中で決して安全でなくなっている。金さえあれば何でも出来るという人間の^{おご}奢りが、自然破壊によるツケが出てきている。原発問題、東北地震、天候異変、^{おきなわ}沖縄問題、年金、社会保障、人々は日常生活に追われ、ものを考える余裕がない。つい自己中になる。

「いざとなれば^{だま}黙っていない」皆さんおっしゃるでしょう。今戦争を語る人が減っています。私なども（86歳）先がない。皆さんの^{ひさん}悲惨な話は戦中^{どこ}何処にいようと、どういう立場であれ、^{だれ}誰もが^{ぎせい}犠牲になったのです。秘密保護法、集団的自衛権閣議決定、事態は^ふ踏み

だされてしまっているのです。今の皆さんの生活は、平和と言う土
台で成立します。戦争というのは、必ず己は正義をかざします。し
かし戦争は集団人殺しの人類の最大の犯罪です。こちらが憎めば、
相手も憎みます。憎しみは繰り返し、終わりなく続くでしょう。

いつ声を挙げるのか。それは今でしょ——。



昭和20年6月撮影(本人)

当時描いたイラスト

「特攻」ののぼり旗を掲げた特攻隊員と、戦艦で攻撃を受けている
ルーズヴェルト米大統領が描かれている。

